

[吊いと技術革新]

③ 搬送式納骨堂を起点に考える 寺院の未来（現代における寺院経営の在り方）



角田賢隆 | 伝燈院／赤坂浄苑

機械式納骨堂

私が館長を務めます「赤坂浄苑」は「伝燈院」というお寺が維持運営する「自動搬送式」の「納骨堂」です。立体駐車場のよう、カードリーダーに個人カードをかざすと先祖の遺骨を納めた「納骨箱」が収蔵スペースから搬送され、参拝スペースに出てきてお参りをする仕組みです。元々は工場などの入出庫管理に使っていたコンピュータ制御の機械システムを、お墓参りに転用した新しいタイプの「お墓」で最近では「地方公共団体」が運営する公営の「お墓」でも採用されるほどに「自動搬送式納骨堂」は一般的になっております。

変化

時代の変化に合わせて供養の方法は細分化されており、その在り方も人さまざまでございます。その一番の要因と考えられるのが「家」を継いでいくという考え方が衰退してきたというところにあると思われまふ。一昔前であれば「家」を途絶えさせないように代々継いでいくという考え方が一般的であり、たとえば子供が女性のみで跡取りがない「家」では養子を迎えてでもその家を途絶えさせないようにしたものでございます。そのような風習が今でも残っているのは余程の名家か伝統芸能の世界ぐらいのものでしょう。良くも悪くも個人主義の時代で「家」というものへのとらわれはなくなりつつあります。

元来「墓」とはまさに「家」を象徴するもので、お寺との関係とともに当主が代々引き継いでいくものであったわけですが、以上のような理由から現代では「お寺」を持たない、代々のお墓を必要とせず、残されたもの

に迷惑をかけないように自身の永代供養のみしてくれるお墓があればよい、あるいは海にまく「散骨」や合葬の「樹木葬」でよいと考える方が増えているのです。

問題点

江戸時代に幕府によるキリスト教排除という目的のため「寺請制度(てらうけせいど)」という制度ができました。寺院は役所のような役割を担い、住民はいずれかの寺院に属し住民票的な書類の交付を受けることが法的に義務付けられたのです。交付を受けなければ社会的に弱い立場になってしまうため、個人的な思想とは別として所属するものは半ば強制的にお寺を支えることとなるのです。これにより寺院には決まった檀家からの安定的な収入があり、持続性が保たれていたと考えられます。

しかしながら現代においては寺院が戸籍管理をすることがなくなり、その上での少子化・高齢化・過疎化に加え、「家」を代々継いでいくという考え方にとらわれなくなったということが寺院経営において大変大きな問題となっております。

たとえば昔は100件の檀家が持ち合い支えていたお寺があったとします。過疎化の影響でその数が半数の50件に減ってしまったとします。そうなってしまっても建物の維持など運営の費用が大きく変わるわけではなく、「年会費」（多くの寺院では檀家に対し管理費的な名目で決まった額を毎年いただいている）では賅えない状況となるわけです。年会費で賅えない部分は寄付という形で檀家をお願いするようになりますが、単純計算で昔より2倍の額を負担する形になるのでお金ばかり取られているという感覚になるわけです。

仮に寄付金が集まらなければその寺院は衰退していき

次の担い手がなくなるでしょうし、実際には寺院を途絶えさせないようお寺の仕事とは別に仕事を持っており、その収入を寺院運営に充てておられる住職さまが多数おられることも事実です。それでも経営の厳しい寺院が廃寺になってしまう流れはなかなか止められるものではないでしょう。

これは何も寺院だけが悪いということではなく寺院経営の在り方が時代にそぐわなくなってきたことが問題なのです。

納骨堂

日本はほかの諸外国に比べとりわけ「先祖供養」が盛んな民族といわれており、正月に始まり春彼岸・お盆・秋彼岸とことあるごとに先祖参りをいたします。信仰心はなくともその時期になるとお墓参りだけは行ったりもします。これは仏教伝来以前の古くからある先祖を敬い、また先祖を通じて今の自分を律し正しく生活していくという素晴らしい文化が脈々と受け継がれてきた証拠です。

一時期郊外にお墓を求めることが映画の題材になるほどブームとなったことがございました。販売開始には夜も明ける前から行列ができるなど異常な状態だったそうです。

しかし、いざ連れ合いを亡くされ納骨された後、若い時分には車でお墓参りしようと思っていたものが自身も年をとってしまい車の運転はできなくなり、電車で行くには一苦勞。そのようなこともあり近年お参りしやすい都心に再びお墓を探される方が増えております。

こうした需要に応じ駅から近い場所にコインロッカー型の「納骨堂」や前述した「自動搬送式納骨堂」が近年多く建設されております。

こういった「お墓」の利点は省スペースで多くの方に縁を結んでいただける点にあります。多くの人に縁をいただくということは利用者側から見れば経済的負担の軽減となり、運営側から見れば無理なく運営費を負担いただけ永続性を確保できる、という双方に理のある運営方法となるのです。

寺院は世襲制による質の低下や担い手不足などの問題で変革の時期に入っております。宗教界全体を考えるとどのような方法が良いか分かりませんが、少なくと

も少人数に多くの負担をお願いしていた今までの在り方は現実問題難しくなり、このような運営方法でないと存続できないような状況になるでしょう。

心

現在収蔵基数が1万を超える「納骨堂」も多数建設されております。万を超える檀家を持つ本山では修行僧・寺務員合わせて200名ほどの人間が業務にあたっておりますが、1つの寺院でそれだけの数を把握し相手にできるのだろうかという疑問に感じる場合がございます。

寺院は一過性のものではなく半永久的に続いていかなければいけないものなので運営（ビジネス）の部分は大変重要になります。時にこのような運営方法は「宗教なのかビジネスなのか」という批判の槍玉にあげられるわけですが、永続性を第一に考えると運営の部分を切り離して考えること自体が意味のないことなのです。

永続性の確保という安心があってはじめて、檀家の心が豊かになる「布教」が心に届いていくのです。

最近檀家の方にお叱りをいただきました。お預かりしたご遺骨の扱い方や寺務員の受け答えについて、ほんの些細なことでしたが管理する側と利用する側の意識のずれを気づかせていただける大変ありがたいご指摘でした。慣れることなく大切なご遺骨を預けている方の気持ちになって対応するように寺務員と共有した次第です。おっしゃられたことで特に印象に残ったのが、「維持する上でビジネスの部分が大切なのは理解できる。だが一番大切なのは心だ。その部分がおろそかになるとありがたい法話も響かない」と言われたことでした。

仏教には「中道（ちゅうどう）」という言葉があります。布教と運営どちらにも偏らず真ん中を目指し、その2つが融合し、さらに超越した新しい形態を作り上げていくことがこれからの寺院が目指すべき在り方なのだと思います。

(2018年4月1日受付)

■角田賢隆 kenryu@dentouin.or.jp

2001年駒澤短期大学仏教科卒業。同年一般企業就職（営業職）。2004年退職。2005年地方僧堂安居。2006年大本山總持寺安居。2013年赤坂浄苑館長就任。